寛政二庚戌年
[illegible]
[illegible]
[illegible]

追加文言

石のえやそのもみぢ 五明
文通

何事もそれ源氏 庵主人

倣赤穂處士韻 山来

寶山寂庵主人

瘦節保枝山松龍
飢猶飽弦好琴聲
清風入吐無窮韻
說文學山月白下
六月下浣 李本氏

凉風や出ぬ暮をも玉ぶすの中 宝
雲猿や石をも枕葉ぬ蔓 氏

井原西鶴の発句
海苔や蒲の穂の風もそよ〳〵と 西鶴
夏の朝こそ涼しけれ
立者活くや蒲の穂ふねの人 同
かくやゆるとそ涼しけれ
石ころも涼しかりけり井筒屋 同
雨粒の消てふるえる蓮哉 同

朱のそみの芝生や月の松蘿
涼風や云ふの毛動く井の蓋
名月や池をめぐりて夜もすがら 桜下

二十目連

蒜市や実も叩も帳る妻の晴 有栗

千部

秋雲寒流を割くふるり外之 白水

古川文弓

秋雲や旭さすまで一つ星

冬仲る馬の仔の尿の気々

ニ世無氏

冬日勝や志ある人の門 玄右

煤竹や乾鮭暑き小家哉

澤瀉や茎の芒の風

初入や鳥こゝろなる雲おもし

冬の雨や鳥こゝろなる雲おもし

口加

土底の松の枝 士山

一日小春のよき事ありぬ

口加

今の徹も雲箱の芒の景哉

おもしろき家や朝より雪の降

朝顔や縄の切口家根の上

二三日涼しき秋や蕎麦の花 九天

已ら風もなし一つ星

朝風やそよ吹下して芥のこと

息元の孤帳さびしき夜や蚊の多

青々や空ふかき秋の夜

蟋蟀涼し灯影芒の穂

垣の花や誰も明の日を待

車椅涼しき新の初風

秋の句

動くとも見ぬ風と迎る鼈哉

文音

[illegible]

[illegible]

[illegible]

夏

秋風や
山の
秋風や
秋風や
秋風や

寛政三辛亥年

山吹や井手を流るゝ鞠の水　素訓
蘆の芽や一巻の経　再可
池の夕ふくべて伸る陽炎　砂明
お迎ひの月を連ねて　素丸
和泉守や戸田の里の春の雨　素和
人の世と成てそうらふ　素丸
村そだち白ひげ生ぬ　素丸
かつ雪や梅の花の枝　湖月
花の中此の世の外の　素丸
里人の笑ひ声なる　素道
名ある山風起る　机月
菜の花や月の出ぬ内　素丸
雛のつゐ立ぬ　素訓

神さびて雛ふすまや梅の枝　湖月
蘆の葉ふるまゝ　素道
秋なき空ふるまゝ　素丸
求食の雁の声　素訓
花の雲凡そ暗き夜　素丸
山一ツ　素道
山吹や井手を流るゝ鞠の水　素訓
蘆の芽や一巻の経　再可
池の夕ふくべて伸る陽炎　砂明
お迎ひの月を連ねて　素丸
和泉守や戸田の里の春の雨　素和
人の世と成てそうらふ　素丸
村そだち白ひげ生ぬ　素丸
かつ雪や梅の花の枝　湖月
花の中此の世の外の　素丸
里人の笑ひ声なる　素道
名ある山風起る　机月
菜の花や月の出ぬ内　素丸
雛のつゐ立ぬ　素訓

水辺

片帆の雲も霜や
十六夜の月 素丸
屋一凡くれ行く秋の
七のうた仕をしまや猿の蓑 素堂
吟ずるかひなき風や
秋林一色の中行秋の
乃一凡 秋ぞ
隆徳を
孤雲の
集の
蕭やうへ
きそ
荻
莊子
燕の巣
燕の巣はかうのう秋の
さびしさ一家のうや四ま智 素丸
雲や四面の屋のうへ
八ツをかぞへて行秋の
秋凡や
猪垣
秋凡や
凡兆の
生の
秋凡や人のまくら辻
秋風
秋凡や人のまくら辻 芳 下 四十四日迄
秋風や雲雁呼こむ秋の中
二人して
まもる
梅雪
心
秋の凡
秋の凡 素丸
雲
秋
月
秋
秋
秋

暁のうそ寒や天の河　五松
麦の芽のからのや妹の菅笠　五松
[illegible]稲妻や月夜　五松
稲妻や月の[illegible]　五松
[illegible]　五松
[illegible]　五松

春

雪のおもしろや雪のふる日もそ
かのこころ雪のふる日もそ
日のめでたさ花もこころの
日のめでたさもの江や四隣の
おもしろや雪ふる時も陸
川ぞの地ふる雪も陸
雪のふる時も陸
元日のこころや
名所のもの
雪山の名所
秋
そのこころや
名所のもの
まちまちの夕程や
秋の月風ふる
俊嵎の

柿の
蒲萄
雪ふる
八月の
雪山
秋
そのこころや
名所のもの
秋の月
雪ふる
秋
まちまちや夕程
秋の月風ふる
俊嵎の

夕ぞ雪山と近きあ
雪をふる夜のふや夕ぞ

七 笛の音ふく月のそら雲雀哉
七 茶の煙ふく嵐の跡のそら
八 はつ雪のそる峰川のまや
八 月哉のかすみ初やおもふ事
七 秋風やおもふ事なき扉風奥
七 地獄そる氷のうへの牛
九 初雪やそるの字ばかり
九 芥子の花そるの字ばかり
十 春雨や蓑着て笠着て

十二ヶ 竹の子や留守に成
十一 門を出れば
再可也共内
ろ哀石井兵庫

五七 神田九兵
弐拾弐年 佐賀
千和 佐屋 貞
吉堀茶民作

歳旦　松梅を
すうそうも
○
なる
春のそら木のつゆもや
雨ふるまつの
春のこゝろ

なし
ちゝはゝやそうの門松
山谷や海をの
くの松もちりしや
散るや
雪をものや出ん
つゐ

千年の小笹山葉や一そよぐ

寛政四壬子年
歳旦　松梅を
すうそうも
○
なる
春のそら木のつゆもや雨ふるまつの
春のこゝろ

なし
ちゝはゝやそうの門松
山谷や海をの
くの松もちりしや
散るや
雪をものや出ん
つゐ

千年の小笹山葉や一そよぐ

二七連

七夕

寛政五癸丑年

夏

秋

山梔のうつろひこそ秋の深き色
ゆく水に数かく暇や紅葉ちる
ちりそめて後や嵐の山もみぢ
たく柴の煙よわるや秋の風
秋や海士の小舟の綱手縄
秋や行く人待つ島の夕煙
秋の風いくせの川を渡るなり
秋の風いづくの誰を松ぼくり
秋の風いづくの誰を松ぼくり
すゝき見て我よ清滝の人
すゝき見てもとの野守や誰
すゝきの穂に出でゝ招くや女郎花
すゝきの穂に出でゝ招くや女郎花
すゝきの穂に出でゝ招くや女郎花

七夕

月さやかなる夜の空のけしき、
いとゝ秋ふかうなりゆくやうなるに、
天の川のながれ、
星合の空をまつ人の心、
いかばかりなるらんなどおもひやるも、
いとゝ心ぼそくて、
川ぞひの家にて、
琴ひきすさびなどするこゑ、
笛のねもいとゝ物あはれなるに、
ふけゆくまゝに、
月もいとゞ澄のぼりて、
風の音、虫の声、
一つにまじりて、
いとゞ物思ふ人の袖をしぼらせ、
露けきこと、
秋の夜の長きにもまさりて、
おぼえらるゝ、
いにしへ、
かの二星の年にまれなる逢瀬を、
かこちけんことわりにも、
おしはかられて、
あはれなり、

川ぞひの家

川ぞひの家にて、
琴ひきすさびなどするこゑ、
笛のねもいとゝ物あはれなるに、
ふけゆくまゝに、
月もいとゞ澄のぼりて、
風の音、虫の声、
一つにまじりて、
いとゞ物思ふ人の袖をしぼらせ、
露けきこと、
秋の夜の長きにもまさりて、
おぼえらるゝ、
いにしへ、
かの二星の年にまれなる逢瀬を、
かこちけんことわりにも、
おしはかられて、
あはれなり、

七夕

月さやかなる夜の空のけしき、
いとゝ秋ふかうなりゆくやうなるに、
天の川のながれ、
星合の空をまつ人の心、
いかばかりなるらんなどおもひやるも、
いとゝ心ぼそくて、
川ぞひの家にて、
琴ひきすさびなどするこゑ、
笛のねもいとゝ物あはれなるに、
ふけゆくまゝに、
月もいとゞ澄のぼりて、
風の音、虫の声、
一つにまじりて、
いとゞ物思ふ人の袖をしぼらせ、
露けきこと、
秋の夜の長きにもまさりて、
おぼえらるゝ、
いにしへ、
かの二星の年にまれなる逢瀬を、
かこちけんことわりにも、
おしはかられて、
あはれなり、

萩の花ふきちる秋の影ぬれて訪ふ
露ぬぐふ袖の色の松やちる
久方を待ちてぞ経る秋の月
雲やそれ帰る雁金稲妻や
稲妻や凡そもさびし山の秋
人の世を思ふ山の秋
一つ家に凡そもさびし神の秋
なくなくも行く人見ゆる秋の中
稲妻をかみそりとやいふ秋の雨
人よ人凡そ世の秋
行く秋ぞ凡そ世の秋
稲妻やおもてを洗ふ秋の雨
稲妻や物くふ人のそれもまた
まつさをやそれもまた
稲妻や物くふ人のそれもまた
物を売る店や秋人の
物を売る店や秋人の
物を売る店や秋人の

我旦

大正十一年十月廿日

水雪

追加

其二

載且

寛政六甲寅年

元三

句合

参元の日

御前　御發句

秋風ふく富士をうしろや宮めぐり　五来

七　七

杉杜や雪あるをかつるもみぢ葉　五来

雪ちるや海の白さへよる千鳥　五来

古寺のもれ猫やどる冬ごもり　五来

古杜の雪汲ひそむ千菜の香　五来

雪ふり積りて厠遠し

雪や湖さむしろをかぶる舟のもの　五来

卯のもとそそる雪の朝の物思ひ　五来

卯の花の雪に白妙の袖ぬらす　五来

久々や水の手ぶそく童風　五来

咲初てまだ花のこゝろ風細し　五来

餞くらめふらし七つうしろり宝屋

雪のそら氷ふなき月の陸宝政

ふるめやれ松一ツ有部屋、

雪の杜此世界、

七夜の月ほのぐ有風、

ふるのうき降ぶりの、

雪の杜降ふり止ぬ、

中川の深き雪ありかの橋、

古杜の雪ふかき雪ありかの橋、

まのこゝろ杜の雪ありかの橋、

雪さらく降久の中雪ありかの橋、

うらゝや二ツ降ふり雪ありかの橋、

雪のそや二ツ降ふり雪ありかの橋、

雪のそやつゝ降ふり雪ありかの橋、

雪の島城のなら木を雪ありかの橋、

雪降ふりそゝぐ雪ありかの橋、

稲川を秋ぶそて鳥乱隔
年魚ふ秋のふる川也乱、
人多のやおもろやや
も麻ふそて収秋
麻のふりわいふ江換江記
ばのふるふいふ秋馬江換江換
秋の山 長柳
ふ風やふのの
ふのふてわ秋江換
ふわふのふ秋や秋のわ忘候
秋やふをふそて忘候
ふわふのふ秋
ふ秋や秋の月秋之吐
ふ秋や

寛政七乙卯年　土御門

○哉旦

寛政七乙卯年

歳旦

○寛政七卯年

花のまこうを鋼の五百番
疾くも風ふくや二見
高きもて千里を越ゆる時鳥

其二

門松もあらぬ庭の冬ごもり二見
雪の中そよぐ扇長
扇売声のいさぎよき初鳥 時雨
売こゑのこる浦の朝霧 波石
冬ごもりおもひ侘ぬる山の里
人もかよはぬ雪の朝戸

二年 杉

うぐひすの高音を聞く羽人
我宿川を辿りて来ぬ時鳥
辿倦雨も厭はず時鳥
よもやまの笹の露我を別け

かたのひもあらはこそ辿らめ
ゆ情ひ三味人をそ多かりき 波石

三年

○寛政八辰年

眠るまも秋雪やかなの山の松 陸我
ふるさとの石苔 玉屋
日の昇る雲の上路のつづら折 我

下もまた雪や春方の山の松 陸我
ふるさとのしるべしてうぐひす初音 玉屋
うぐひすや雪ふる水たまる雨水 北
うぐひすの経巻ひらく初音かな 梅牛
初雪や春方の色隈